

新民謡の流行

—『民謡詩人』を中心に

近藤 周吾

私の勤務する富山高専の研究室では、北陸の詩や新民謡に関する資料を収集しており、コレクションの一環としてゐる。その中に『民謡と詩』というものがある。これはどのような資料であり、どのように位置づけることができるのかということについて、その一端を富山の文学との関連を中心にしながら、以下、簡潔に触れていこうと思う。

一

函に入れられた『民謡と詩』は、一九二八年（昭和三年）一月に製本された、雑誌『民謡詩人』（民謡詩人社「東京市外西巢鴨町巢鴨二二八」の七冊合本である。七冊というのは、目次に従えば『民謡詩人』第二巻第三號・

第二巻第四號・第二巻第五號・第二巻第六號・第二巻第七號・第三巻第八號・第三巻第九號の七冊であり、奥付に従えば、No. 7、（奥付欠）、9、10、11、12、13である。発行年月はそれぞれ昭和三年三月一日、（奥付欠）、五月一日、六月十日、七月一日、八月一日、九月一日となる。大捌賣店は「東京堂 東海堂 北陸館 大東館」となっている。

私はこれまで富山の詩に関する研究を、次のような、いささか遠大な方針と構想に基づいて進めてきた。①実証的なアプローチにより、日本近代詩史を再審する。②『日本海詩人』や『詩と民謡』といった詩誌に着目し、北陸詩壇の全貌を明らかにする。③大村正次や中山輝、川口清の動向を追うことにより、井上靖や源氏鶏太の研究を深める。

要するに、今、このような文脈の中に『民謡詩人』を持ち込もうとしているわけだが、その理由は二つある。第一に、当時の新民謡の状況が、中央詩壇においてどのようなものであったのかが理解できるからである。実際、野口雨情、三木露風、佐藤惣之助、福田正夫、白鳥省吾、川路柳虹、草野心平らの名前が見える。第二に、そこに

北陸の文学者の活躍も認められるからである。具体的には『日本海詩人』および『詩と民謡』の主筆級の活躍が認められるからであり、翁久允の小特集のようなものが組み立てられている点も見逃せないと考ええるからである。

第二の点の前者に関しては、高山を代表する詩人・福田夕咲や富山で活躍した民謡詩人・山岸曙光子のものもあり興味は尽きないが、井上靖の師である大村正次と、源氏鶏太の師である中山輝に絞って調べてみても、次のような詩篇等が発表されていたことがわかる。

第二卷第三號（昭和三・三）

大村正次

〔民謡〕「ことツしや雪年」

〔詩篇〕「田螺」

中山輝

〔民謡〕「こないな」

〔詩篇〕「模索」

第二卷第四號（昭和三・四）

大村正次

〔民謡〕「ほのほとならう」

中山輝

〔詩篇〕「山巔にゐると」

第二卷第五號（昭和三・五）

大村正次

〔民謡〕「粉雪」

中山輝

〔民謡〕「眞珠」

〔詩篇〕「眞實の道」

第二卷第六號（昭和三・六）

大村正次

〔散文詩〕「神様に見放されるもの」

中山輝

〔詩篇〕「轉落する石」

第二卷第七號（昭和三・七）

中山輝

〔詩篇〕「火華」

「――」〔雪と北陸歌謡〕

第三卷第八號（昭和三・八）

中山輝

〔詩篇〕「石像」

「雪と北陸歌謠」

第三卷第九號（昭和三・九）

中山輝

「詩篇」「河原の石」

二

他方、このころは翁久允が長篇小説『道なき道』（甲子社書房、一九二八年）と随筆集『コスモポリタンは語る』（聚英閣、一九二八年）を刊行していた時期に当たるわけだが、これらの刊行が話題になっているという意味でも見逃せない。

第三卷第九號（昭和三・九）

都築益世・広瀬操吉・木村重夫「翁久允氏の随筆集に就いて」

竹久夢二「翁君に送る」

「翁久允氏の随筆集に就いて」は、翁久允の『コスモポリタンは語る』が同時代にどのように受容されていた

かを具体的に明らかにする資料と言える。都築益世「コスモポリタンは語る」では、「翁氏は、自省のないコスモポリタンではなくて、かへつて、熾烈な愛国精神に燃ゆるパトリオットではなからうか。」と書いており、その後の翁久允の生き方の急所を早くも言い当てている。広瀬操吉「宇宙人は語る」の印象も、「このコスモポリタンには、やはり我等と同じ日本人の血が流れてゐて、どうしても祖國とは切りはなすことが出来なかつた、もう一人であつた」と捉えている。木村重夫「宇宙人は語る」小感もまた、「廣く世界の風潮を理解して、初めて故國に切々たる感情を持ち得た宇宙的日本人たること」を指摘しており、「日本人」ということが意識されている傾向がうかがえる。

他方、「翁君に送る」は、翁久允と竹久夢二の交遊の実態を明らかにする上で逸することのできない資料であると言ふことができる。題字は夢二の筆跡であり、「出版記念會の日に會した藤田君から兄の近著についての批評を書くやうにと依托を受けて、感想ぐらいなら書いて見やうと約束して、そのつもりで讀むには讀んだがどうも感想を書く氣になれないので、私信の形で手紙をかく。」

という書き出しで始まり、「糸魚川の相馬御風君のこと、富山の淀川のかこんの女のこと、その他、ぼくが浴衣がけで淀川を飛出して富山の町を走りながら、君に一方ならぬお世話をやかせたことを書きたいのだが」と思わせぶりなことも書いて、ペンを擱いている。

ここで『富山新報』（昭和四年八月一三日）の記事もあわせて参考にとすると、さらに興味深いことがわかりかてくる。

《郷土芸能小原節 保存会設立総会

十一日諸名士を迎へて
来月一日から実地宣伝

婦負郡八尾町にては県知事、内務部長その他中央芸術界の大家を顧問として組織せる小原節保存会の設立総会を、十一日午後四時より同町八尾劇場に於て開催した。県よりは各顧問を代表して清水商工課長の出席あり。

来賓として竹久夢二、翁久允、水木伸一、藤田健次、若柳吉三郎、同吉美津の名士を迎えて盛大に開会され、同

会の創立の功労者、川崎順二氏を主事に推薦し、各役員の選挙、保存会の主意等を協議決定し、来賓諸氏の祝辞、講演ありて、同六時閉会。次いで、小原節の実演に移り、各名士の批判を受けて午後八時四十分、盛会裡に散会した。

しかし、来る九月一日夜より三日間、風の盆を好期として改良小原節を以て町内を練り回り、大いに郷土民謡の宣伝に努むることになった。》

引用は、おわらを語る会編『おわらの記憶』（桂書房、二〇一三年八月）による。一九二九年の夏、竹久夢二・翁久允・藤田健次が、民謡の産地として知られる八尾町を訪ねていることがわかる。

そもそも『民謡詩人』は、編集人が藤田健次、発行人は岩本貞一、装幀を竹久夢二が務めた雑誌である。そのことを知らなければどうしようもないが、それを知った上でこの記事を見なおしてみると、見え方も少し変わってくるだろう。

富山市立図書館の翁久允文庫には、戦後に復活した『詩と民謡』が所蔵されているが、そこには早川嘉一の送り

状も挟まれた状態で保管されている。早川嘉一は、戦後に中山輝から『詩と民謡』の編集を引き継いだ富山を代表する民謡詩人の一人である。

このようなことも含めて考えてみると、翁久允が富山の詩壇にもたらしたものの、媒介したものの一つに『民謡詩人』の精神があったというふうに言ってみたい誘惑に駆られる。中山輝や早川嘉一の編んだ『詩と民謡』という雑誌のタイトルにしても、案外、『民謡と詩』あたりから来ているという可能性も、否定することはできないのだから。

翁久允の『高志人』の重要性も、このような文脈の上で説明していく必要があると私などは考えている。ハンガリーでは、二〇世紀初頭にコダーイやバルトークが民謡を採集して以来、民謡研究の伝統が確立しているのに対し、日本、とりわけ戦後に編まれた日本近代の文学史や詩史、音楽史、教科書等においては、民謡というジャンルが暴力的なまでに排除され、蚊帳の外に置かれるという事態が起こり、それが常態化してきている。それはおそらく、グローバルであることとローカルであること、インターナショナルなものとナショナルなもの、コスモ

ポリタニズムとパトリオティズムの乖離を意味しており、ある種の起源の書き換え、リヴィジョンが進行していることを露呈している。翁久允という、世界と郷土の両方に立脚できた存在を追尋していくこと自体、価値の高い仕事であると言えようが、そこでもやはり民謡とのつながりは押さえておく必要があるのではなからうか。『民謡と詩』を手に取るだけでも、そのような感想を得ることが出来る。

なお「富山の淀川のかこんの女」等のエピソードについては、今後の研究課題としたい。

付記 本稿は、富山文学の会（二〇一四年六月一八日於・富山大学人文学部）における同題の発表を成稿化したものである。席上、多くのご教示を賜った。記して御礼申し上げる。